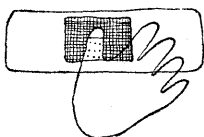


## エリクソンと幼児教育 (14)



仁科 弥生

### 同一性の危機 ルターの場合(1)

同一性の形成において、青年は自分自身に対して抱くイメージ、つまり鋭くなった自意識がとらえる自分のあり方と、他人が彼に対して判断し期待するイメージとの間に、ある種の意味のある共通性を見いださなければならぬと、エリクソンはいう。それは、すでに習得してきた自分の諸能力と現在における可能性との結合であるにとらえることもできる。また、それは、個人の成長過程で発達したまったく意識されない基本的条件と、幾世代にもわたって変化を重ねてつくりだされてきた社会的条件との結合でもある。したがって、それは必然的に何らかの心理的葛藤を伴う過程である。またその危機の現われ方や、その克服の仕方は、個々の青年によって、社会によって、或は歴史的時代によってさまざまな様相を呈する。しかもそれらの危機は、青年が解決方法を見つけたすまで、彼を「患者」にしてしまうこともあるという。

宗教改革者マルティン・ルターもある時期には激しい心理的葛藤に悩み、深刻な同一性の危機にさらされた一人の青年であった。前回で触れたように、エリクソンはその著書『青年ルター』（一九五八年）の中で、そのルターの同一性の形成を跡づけている。

まず、その第一章「症例と事件」で、エリクソンの視点が明らかにされている。ルターの研究者たちは彼の病的な宗教的懷疑についてしばしば問題にしてきた。たしかに、ルターはうつ状態や発作的な激怒、反抗や執拗さなどで「症例」と呼ばれるにふさわしい時期があったと伝えられている。しかしそうしたことの一方で彼は神学の不合理なドグマを破壊して宗教改革者ルターとなった。オースティン・リッグス・センターで、才能に恵まれていながら強い心理的障害をうけていた青年たちの治療に当たったエリクソンは、患者性というものについてもっと広い意味でとらえるべきである、つまり「負わされた苦悩とか、いやされるための激しい要求とか、自己の苦悩を表現したい情熱といったもの」を含めるべきであ

ると考えるようになっていた。ルターの患者性についても、同じように、より広い意味でアプローチし、それをルターの同一性形成における危機に由来するものであると仮定した。そして青年ルターのそのような経験全体が彼の徹底した自我の統合力によって、ただ一宗派にとつて意義をもつという域をはるかに越えて、一つの歴史的意義をもつ「事件」になっていく過程を、エリクソンは個人の生活史と歴史という全体的な構図との緊密な関連において解き明かしたのである。

したがって、それはルターの多くの著作と彼に関する膨大な文献に基づいて、単に心理学的問題のみならず、宗教的、政治的問題にわたって詳細に論証したものである。しかし、ここでは同一性の危機に関するエリクソン理解を深めるという目的に焦点をしぼって、その一部分を紹介しようと思う。

マルティン・ルターは一四八三年にドイツの中ほどにあるマンズフェルト地方のアイスレーベンで生まれた。

この中部ドイツには、丘陵地帯が続ぎ、森と牧場が広が

るおだやかな地勢を背景に、歴史的に、とらわれないで自由に行動できる人間を生みだす風土があった。マルティンの父ハンスは、当時の、年長の息子たちは父親の農地を最年少の弟に与えなければならぬという末子相続制のために、二十代のはじめ、テューリンゲンの農村、メーラの祖父の農地を離れ、近くの鉱山の町アイスレーベンへ移り住んだ。そこでマルティンは生まれたのである。しかし翌年、ハンスは、当時繁栄していた銅と銀の鉱山の中心地、マンスフェルトへ再び居を移し、そこで成功するのである。彼は、二つの熔鉱炉を領主から借りうけて、粗銅生産の小工場主となり、移転後わずかに七年で、町の副市長四名の中の一人に選ばれるほどになった。

マルティンは七歳でラテン語学校へ入れられた。当時、ラテン語は学問の道にすすむための重要な道具とみなされており、子どもに対して大きな期待をもっている親だけが子どもをそのような学校に送ったといわれている。ルター之父も息子が将来法律家になることを望んで

いたという。それは鉱夫の子弟が進むことのできるもっとも順調な立身の途であった。一五〇一年の春、十七歳でエルフルト大学に入学した。この大学はドイツで第一位の評判を得ていた大学で、その法学部は最高の教授陣を擁していた。彼は文法、論理、修辭学、物理学、哲学などのコースをとった。教師の中に、トルトフェターやウルジンゲンがいた。彼らはウィリアム・オッカムの哲学上の後継者であった。オッカムは十四世紀の英国の僧でローマ教会内における造反者である。一五〇二年の秋までに、ルターは文学士の学位を取得し、さらに一五〇五年に一七人中二番の成績で文学修士になり、それから父の命令で法学の勉強を始めている。二一歳であった。しかしその二ヶ月後に、父親の許可も得ずに突然、同じエルフルトにある戒律厳守派のアウグスチン派の修道院へ入ったのであった。実はその少し前に、法学部の学期半ばであったにもかかわらず、彼は欠席許可を願い出、マンスフェルトの両親の家に帰省し、大学への帰途、激しい落雷にあい、大地に投げ出された。その出来事を彼は

天からのしるしであると受け止め、その場で僧になることを誓ったと伝えられている。後になってルターが語ったところによると、その時、彼はあたかも突然の死の恐怖によって完全に囲まれたように感じ、無意識に「聖アソナよ、助けたまえ、私は修道士になります。」と叫んでしまっていたという。父は狂ったように怒った。友人たちも引き止めようとしたが、それにもかかわらず、ルターがその誓いを守りつづけたのは、彼自身の内部に修道院へと彼をかりたてる強烈な何かがあったからであるにちがいない。

エリクソンによると、その頃のルターの気持は強い悲嘆の状態であった。うつ的な無力さの中で、彼は父が望んでいたように勉強をつづけることも、父がすすめる結婚について考えることもできなくなっていた。落雷にあつて、彼は無限の不安を感じた。その不安は、閉じ込められ、息がつかまる感じを意味し、それはルターが彼の生活や人生の全領域がしめつけられると感じ、一つの道しか残されていないと考えていたことを示しているとい

う。その残された道とは、今までの生活と、囑望された未来のすべてを放棄し、修道院の新しい生活にすべてを捧げるということである。さらに、エリクソンはそこにルターの屈折した感情を読みとっている。なぜなら、ルターが呼び求めた聖アソナは、鉱山労働者たちの健康を見守り、突発事故から彼らを保護する偶像であり、したがって父親の守護聖人であった。だからそこには父親への不服従というマルティンの意図と、この守護聖人が彼を死から守ってくれるように、或は父親との仲介をしてくれるようにという彼の願いが重ね合わされるとみることができるところである。

ところで、アウグスチン会は、学問的に高評価をうけており、社会的には上流および中流階級を代表していた。このことについて、「彼は自分で考えうる最良の学校を選んだ。」とエリクソンは指摘する。つまり、彼は父親に対して巧妙な形で反抗はしていたものの、父親の意向を完全に無視することはできないでいたのである。父親との同一化が濃い影を落としている事実を物語るもの

であろう。その後、ルターは二三歳で聖カトリック教会の司祭に任命された。さらに神学を学び、二八歳で神学博士を得ている。そして三三歳のとき、ウィッテンベルグの教会の扉に贖宥状販売に抗議する九五ヶ条の提題を打ちつけたのであった。この十二年におよぶモラトリアムの間に、若いマルティンは試練を乗りこえ、宗教的人間としての同一性を見いだし、改革者ルターといわれる基礎を確立したのであった。

さて、エリクソンは、同一性の危機を象徴する事件として、ルターが二〇代の半ばのあるとき、エルフルト修道院の聖歌隊で、突然床に倒れ、錯乱状態の中で、「私ではない！」と叫んだ出来事に注目し、「聖歌隊での発作」という一章をもうけて、それを次のように分析している。

それはマルコ福音書九章のおしの霊につかれた男をキリストがいやす物語の朗読の際に起った。エリクソンは、まず、その発作や、先の雷雨の中で示したようなルターの恐慌状態などについての他の研究者の見解に触れ

ている。たとえば、プロテスタントの神学者や哲学者は、ルターの血の気が多くて暴力的な気質を指摘し、彼は自分自身に対する疑惑と不満を自分の内部に秘めておくことができない男であったと考えている。ルター派の学者や聖職者は、ルターの激情を心理学的な危機としてではなく、魂の危機とみなしている。カトリックの側では、ルターの苦悩は反キリストということが精神的問題であるという意味においての苦悩であるとし、たとえば、ドミニコ会のハインリヒ・デニフレは、ルターが雷雨の中で聖霊を感じて、自分の生命を教会に捧げる決心をしたと主張するのは自己妄想であると断定する。或は、デンマークの精神医パウル・ライターは、ルターの聖歌隊での発作を重い精神病的な事柄であるときみなし、彼の二二歳から三〇歳は一つの長い病期の一部であり、徐々に悪化していった精神病の一病相であると考えている。つまりその発作を意味深い心理学的発達との関連で考えることを否定している。

それらに対して、エリクソンは、ルターの「私ではな

い！」という発作の中での言葉を激しい同一性の危機の一部であるにとらえ、エリクソンの同一性の概念がその解明に役立つであろうという立場をとっている。まず、エリクソンによれば、真の宗教的経験では、無意識に出てくる叫び声は神的な靈感によって発せられたかのように響き、それは強烈に記憶されるものである。ところがルターは聖歌隊における発作をまったくおぼえていないという。したがって、その発作の際の彼の言葉は、自分に対する糾弾を否定しなければならぬ内的必要がいかんともしがたいものとしてあったことをあらわしていると解釈されている。つまり「私は私の父が言ったような私ではないし、私の良心が私をきめつけようとするような私でもない！」と。そしてさらに、この事件がその背景として次のような出来事を踏まえもっていること言及して、論証している。すなわち、ルターは司祭になり、ミサの儀式をつかさどることになった。その最初の日には父もエルフルトに出てきた。ところが、マルティンは極度の不安におそわれ、ミサの式からまさに逃げだ

そうとしたが、院長によっておさえられたということ、ミサに続く晩餐の席で父ハンスが怒りをこめて大声を発したという二つの出来事である。当時、ルターは修道僧として勤めを励めば励むほど良心がとぎすまされ、ますます自分の内面の邪さを感じ、いよいよ神を恐怖するようになっていた。マルティンの父が大声で口にしたことは、あの落雷は神が与えたのではなくて、悪魔の幽霊の声だったのではないかという疑いであった。マルティンはこの父親の疑いを気にしつづけていた。こうして父親の願望を裏切った息子は、修道院でより一層、宗教的上司に従おうとした。しかし反発する心を抑えきることはできなかつたし、カトリック教会に自分をすっかり適応させることもできないでいた。「その危機においてこの若き修道士はおそらく彼の真の自分自身、また将来の自分自身に向ってつき進むために、彼がそうでなかったものに、（しかしとりつかれた、罪深いなどと糾弾されていた）反抗せざるをえないと感じたと思われる。」したがって、発作でルターが経験したものは、自我の一

時的な喪失であり、捨てられるべき同一性を否定する激しい感情であったという。さらに、エリクソンは、この一つの出来事に、神経症的症状にみられる両面価値感情の表現を読みとっている。すなわち、その発作で叫ばれた言葉の部分は父親の主張を否定するものであったが、その発作は、ルターが悪霊にとりつかれていたという父親の指摘を実証するようなものであった。つまり、その出来事は父親への無意識の服従であると共に、修道院に対する反抗でもあったと解することができる。そして、それは、ルターが、父親への曲折した服従と、熱心に従おうとしていた修道院の誓約への服従との十字路にさしかかっていたことを示すものと分析されている。事実、その発作以後、ルターの父親に対する挑戦的な行動が表現されやすくなり、彼の反抗はその頂点では、神への服従、教皇への服従、そして帝王たちへの服従という問題へ向けられていったのである。

では、このような青年ルターの子ども時代はどのようなものだったのであろうか。『幼児期と社会』の著者エ

リクソンは、ルターの幼児期および青年期に関する信頼できる資料は殆どないという制約のもとで、彼の生い立ちを次のように論じている。

ルターの家族は、先にも触れたように、マルティンの時代に離農して市民となった一家である。エリクソンは、離農者が成功者へと変わっていく過程で、その一家の行動の新しい基準や新しい価値観がどのように統合されていったか、つまりそこに内包された一家の同一性の問題に特に注目している。

まず、ルターの父は農民としての同一性を放棄しただけではなく、それに対抗する姿勢をもち、子どもたちに新しい目標の追求に役立つようなしつけと教育を精力的に行なった。その目標は、当時、多くの離農者をつくりだした無産階級化に足をすくわれることなく、鉱山の管理階級へと自分を高めるために努力するということであった。マルティンの母は都会の出身であり、夫の身分を高める努力を彼女も助けたと思われる。したがって、農民というイメージはマルティンが育った空気の中では否

定的な同一性の断片と呼ばれるものであった。否定的同一性は家族が忘れてしまいたいと思うようなものであり、過去の要素が多少なりとも残っていると、それを子どもの心の奥深くにおしこめてしまおうと家族が心がけるようなものである。（ここに後年のルターが農民に示した態度の原点があるとエリクソンはみている。）父ハンスは成功して小工場主という経営者階級の地位をかちえた。しかし中世末期は経済活動が活発になるにつれて、鉱山労働者も無産階級化をまぬがれることはできなかった。そのような状況の中で、ハンスは不安や希望をもって息子に接した。そして息子が法律家として、諸候や新興都市、商業経営者などのためにも仕事をするようになることを強く望んだ。

ルターの父は模範的市民になったが家庭にあつては二面性に身をゆだねていたことが指摘されている。すなわち、経済的野望にもえた父はきびしい父権主義をふりかざし、父親が与える禁止や父親から予測される罰が家庭全体をおおっていたという。それがエディプス・コンプ

レックスが大きくふくれ上っていく土壌となり、マルティンの自発性に罪悪感と劣等感という重荷を負わせることになった。そして服従と反抗という屈折した強迫的傾向を強めたのであろうと推察できるのである。しかし、その一方で、父にはまるで感傷的といつてよいようなやり方で自分になつかせる扱い方で子どもたちを育てる面もあった。しかし、これはかえってマルティンに父親の正しさに強い疑惑を抱かせる結果となった。こうして早熟で感受性の強い少年はきわめてきびしい良心をもつようになった。この父子の関係をエリクソンは次のように分析している。「マルティンは彼の父親をひどく恐れ、時でさえ、本当にその父親を悩むことができなかった。ただ悲しむことができただけである。ハンスもこの少年を身近かに引き寄せることができなかった。また、時には爆発的な怒りをもつても、永い間彼を放してそのゆくがままにしておくことができなかった。この二人は互いに深い投資を相手に行なっており、どちら側もそれを放棄することができず、それでいながら二人ともそれをど



のような結実にも至らせることができなかつた。」そして、エリクソンはこれと同じような親子関係がアメリカの若い患者とその母親との間にも存在すると指摘する。もっとも、今日のアメリカで子どもの同一性獲得の決定的な力となるのは母親であるという。子どもは一人の大切に思う親から祝福されたいと願う。しかし、それは彼が何かを行ない、何かをなしとげるためにはない。彼が彼であるためにそう欲するのである。一方、親はこの一人の子どもを自分を正当化するための特別の子どもとして選びとる。だからこの親が問うのは、「お前は何をやりとげたの？ 私のためにお前は何を行なったのか？」ということだけであるという。父ハンスがマルティンの生活で果たしたのはまさにこの役割であった。しかも彼があまりに一途であったために、母親の存在はかすんでしまったのであろうという。

ルター自身が母による罰を回想して次のように述べたことが伝えられている。「くるみ一つ盗んだために、私は母から血が出るまでむちでたたかれたことがある。

そのような厳格なしつけが私を修道院へ導くようになったと言えるだろう。」と。エリクソンはこれを次のように解釈している。ルターは彼を修道院へと行かせたのは神であったと確信していたので、それは修道士生活へ導いたという意味であり、過度に注意深かつた母親が、ルソーの二十代の初めの頃の宗教心ももっていた過度の神経症的な面をつくりだしたと言っているであろうという。ルターの母親については他の文献から知りうるものは非常に少ないので、エリクソンは臨床家の判断として次のように推測している。すなわち、もしルターが母親に無視され、ただ罰せられた少年ならば、また母親の声が天国の歌となつて彼にひびくことがなかつたならば、成人したルターが、あのように他の人を深く気づかい、人を指導し、人と共に歌い、語り、福祉について心配するということを知ることにはなかつたであらうと。

また、テューリンゲンの農民は今日に至るまで、ドイツでもっとも迷信深い人々である。テューリンゲンの鉱山労働者はその農民よりも迷信深かつたと伝えられて

いる。落盤のたえざる危険が彼らを原始的な迷信へ走らせたであろうことは容易に想像できることである。この世界にハンスは二十代の初めに入った。彼がそこでえた労働観と宇宙観がマルティンの子ども時代に投じた影響も見逃せないであろうとエリクソンは指摘する。たとえば、キラキラ光るものがすべて金ではないという諺は、鉱山労働者にとって生きた教訓であった。彼らはすべてに注意深く、疑い深かった。また彼らの間では、血眼になって光るものをさがさせ、彼らを事故に追いやる強い欲望は悪魔に帰せられた。ハンスがルターに、神のすばらしい顯示のただ中でも「幽霊」を警戒したほうがいと戒めたという話は彼の猜疑心の深さを物語るものであろう。母は父よりも一層迷信深い人間であったという。また落盤事故への恐怖は、ルターを突然おそう裁きに對して敏感にした。大變動に對する強い期待、神の審判に備えたいという欲求はあの落雷のはるか以前からマルティンの世界の一部分であった。そのことが落雷にあのよ  
うな意味を与えることになったのであるとエリクソン

は推測している。

このように、マルティンはきびしい良心と、そして父親の疑い深さ、見上げられるべき高い目標に向かう両親の関心などを自分のものにしたのであった。

Colas, R. 『エリク・H・エリクソンの研究』 鎌幹八郎訳 へ

りかん社 一九八〇

Erlikson, E. H. 『青年ルター』 大沼隆訳 教文館 一九七四

松田智雄編 『世界の歴史』 第七卷 中央公論社

(津田塾大学)

